

氏 名	小島 芙美子
ヨ ミ ガ ナ	コジマ フミコ
学 位 の 種 類	博士（音楽）
学 位 記 番 号	博音第324号
学 位 授 与 年 月 日	平成31年3月25日
学 位 論 文 等 題 目	〈論文〉J. S. バッハのカンタータBWV 51とBWV 199における技巧的・劇的表現を巡って ー当時の女性ソプラノ歌手の活躍の観点からー 〈演奏〉J. S. BACH カンタータ第51番 《全地よ、神にむかいて歓呼せよ》BWV51 カンタータ第199番 《わが心は血の海を漂う》BWV199（ケーテン稿）
論文等審査委員	
主査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 野々下 由香里
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 大塚 直哉
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 大角 欣矢
副査	東京藝術大学 教授（音楽学部） 廣江 理枝
副査	東京藝術大学 准教授（音楽学部） 櫻田 亮

(論文内容の要旨)

本研究は、ヨハン・ゼバスティアン・バッハJohann Sebastian Bach (1685-1750) のソプラノのためのソロ・カンタータ作品である、《全地よ、神にむかいて歓呼せよJauchzet Gott in allen Landen》BWV 51と、《わが心は血の海を漂うMein Herze schwimmt im Blut》BWV 199に見られる技巧的要素や劇的な表現に、当時バッハの周辺における女性ソプラノ歌手の活躍がなんらかの重要な影響を与えていたのではないかと、ということを論じ、現代の女性ソプラノ歌手のレパートリーとして、その演奏論を展開することを目的としている。

今日、バッハのカンタータの演奏現場では、例外はあるにせよ、ソプラノのソロは大人の女性の声によって歌われることが多く、またその響きに現代の私たちの耳は慣れてきた。しかし当時、バッハは自身の「教会カンタータ」作品を上演する際、宗教上の慣習に従って、男性ソプラノ歌手を主として起用したと考えられている。しかしながら、BWV 51 と BWV 199 の2つのソロ・カンタータ作品は、「教会カンタータ」でありながら、その成立や再演に女性ソプラノ歌手の影響がある可能性を否定できない。

当時オペラなどでも活躍をしていた、いわゆる女性スター歌手は、広い音域や技巧的なパッセージを歌いこなす歌唱能力、また歌詞を深く理解することによって可能となる、劇的で大きな表現力を持ち合わせていたことだろう。この圧倒的な女性ソプラノのイメージが、バッハに日頃の制約を超えて、ときに大胆なソプラノ・パートを書かせたこともあったのではないかと、という仮説から、これらの作品の成立や再演時にバッハに影響を与えた“女性ソプラノ歌手”像の痕跡を、楽譜の中から見つけることができないだろうか考えた。このような女性ソプラノ歌手の活躍を、これらの作品の歌唱パートと重ね合わせることによって、現代のソプラノ歌手が作品の本来の魅力を生かしながら、現代において演奏するヒントになるものを浮かび上がらせたい、というのが本研究のねらいである。

本論第1章では、バッハの「カンタータ」の定義について考察し、本研究で取り上げる対象作品の位置づけを明らかにした。

第2章では、バッハの時代における女性ソプラノ歌手について述べたうえで、当時バッハの周辺に存在した2人の女性ソプラノ歌手、クリスティアーネ・パウリーネ・ケルナーChristiane Pauline Kellner (1664-1745) と、アンナ・マクダレーナ・バッハAnna Magdalena Bach (1701-60) について、バッハの声楽作品との関わりに焦点を当てながら論じ、そのソプラノ像に迫った。

第3章では、BWV 51 が技巧的要素の強い作品に出来上がった背景や、作品の成立に影響が考えられるソプラノ歌手の痕跡を、その演奏論とともに考察していった。

第4章では、BWV 199 の作品の成立と変遷を述べ、教会以外での演奏機会の可能性が指摘された、ケーテン第2稿における女性ソプラノ歌手の関わりを考察した。そのうえで、作品に見られる劇的な表現に注目を置きながら、バッハが BWV 199 の成立に関してどのようなソプラノのイメージをもって音楽化をしたのかを、歌詞台本の考察を踏まえながら、その演奏論を展開した。

これらの研究の結果、作品が要求する技巧的要素や劇的な表現によって、当時バッハの周辺で活躍をしていた、男性・女性を問わずスター歌手といわれるようなソプラノ歌手の存在が、少なからずその成立や再演時に影響を及ぼしていたのではないかと、という結論が導き出された。

BWV 51 では、名人芸のような卓越した「声」の魅力を、広い音域や高度な歌唱技術を要求する旋律などの技巧的要素を駆使して、当時流行のオペラを意識した華やかな作風に仕立てていることから、この作品の成立時にはバッハが触れてきたオペラ劇場で活躍していた、スター歌手としてのソプラノ歌手像が大きく影響していることが考えられた。それは当時人気のあった男性ソプラノ歌手の可能性もあるし、宮廷で活躍した女性ソプラノ歌手の可能性も否定できない。一方、BWV 199 においては、その高度な歌唱技術と共に、歌詞台本に書かれた内容を「一人芝居」のように演じていく要素のある作品であることが分かった。この作品には、「声」そのものの魅力はさることながら、その詩の中に描かれた主人公を「声」で演じる、歌詞の深い理解によって可能となる「声」の表現力が迫及される。それはこの作品に見られる多彩な表現が、劇場などで経験を積んだ、劇的な表現力を持ち合わせた成熟した歌手の力を要求しているように思われるからである。しかし、その楽譜の中から当時の女性ソプラノ歌手の影響といえる確かな痕跡を見出すことは、残念ながら難しいことが分かった。

このように本研究では、両作品に見られる女性ソプラノ歌手の影響といえる、確たる証拠を見つけることが難しく、近年の先行研究で提示された様々な仮説の上に、多くの推測を重ねた研究となったことはやはり否めなかった。だが、少なくともこれまで、男性ソプラノ歌手の可能性が優先されて論じられてきたこの両作品について、歴史的状況から、また音楽の面からも女性ソプラノ歌手の可能性も大いにありうるという結論は得られた。さらに、現代のソプラノ歌手である筆者がこれらの作品の本来の魅力を生かしながら、現代において演奏するたくさんのヒントも得られた。この2つの作品が要求する

様々な技巧的要素や劇的表現を伴った歌唱パートは、バッハが現代のわれわれと変わらない、「声」そのものの豊かな魅力あふれる表現を真に求めていたからである、と確信を持つことができた。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、J. S. バッハのソプラノのためのソロ・カンタータ、《全地よ、神にむかいて歓呼せよ Jauchzet Gott in allen Landen》BWV51と、《わが心は血の海を漂う Mein Herze schwimmt im Blut》BWV199をとりあげ、バッハの周辺に存在した女性ソプラノ歌手の活躍が、当該曲の作曲に与えた影響を考察しつつ、現代に生きる女性ソプラノ歌手の立場から、演奏論を展開するものである。

論文は、関連資料を丁寧に読み込み、明瞭な論旨でわかりやすくまとめられている。第1章でバッハのカンタータ全体を概観後、当該作品の位置付けをし、第2章でバッハの周辺で活躍したことがわかっている2人の女性ソプラノ歌手（パウリーネ・ケルナーとバッハの2番目の妻アンナ・マグダレーナ）とバッハの声楽作品との関連性を、先行研究を参考にしながら整理している。さらに第3章と第4章において当該曲の分析考察を経て演奏論を展開し、この2曲のカンタータが、女性ソプラノとは断定できないが、経験豊かな「スター歌手」の歌唱力を要求していることを明らかにした。

BWV51の「技巧的要素」を考察するには、少年が歌ったことが確実なバッハ作品や、バッハが聴いた可能性の高いハンブルグやツェレの宮廷で上演されたオペラ作品との比較が必要であったこと、さらにBWV199の「劇的表現」を考察する上でも、第4章の楽曲分析において修辭的技法や象徴表現を反映させた掘り下げや、同じ「悔い改め」の主題を扱ったバッハの他の作品との比較も必要であったことが論文審査会で指摘された。

しかしながら、2002年にサンクトペテルブルグで発見されたバッハの自筆資料に基づき、教会外での（女性ソプラノの起用が考えられる）演奏が推測されるBWV199のケーテン第2稿について検証し、2019年2月12日（火）第2ホールで行われた学位審査演奏会で、実際にこの稿を用いて、古楽アンサンブルとともに（日本初演と予想される）演奏を行ったことは意義深く、作品の新たな視点に光をあてるものとなった。後半のBWV51では難曲を破綻なく演奏することに意識が集中してしまったが、細かいパッセージを操る技術は十分に持っているので、ドイツ語の修辭的表現の工夫など、今後の成長に期待したい。以上、論文と演奏を総合的に評価し、博士学位を授与するに値すると判断した。